

『無名草子』試論

——藤壺の宮はめでたき女が——

井上千鶴子

私たちは普通『源氏物語』の藤壺の宮は、光源氏の理想の女性、永遠の恋人であり、『源氏物語』中の最重要人物の一人として疑わない。そしてそれは鎌倉時代の読者にとっても同様であろうと考えがちである。たとえば、『源氏物語四十八ものたとへの事』^①では真つ先に挙げる男は光源氏と薫大将、そして女は、

a 女、紫の上を措き奉りて誰か。

みめかたち、藤壺。

心ばせ、宇治の姉君。

果報、明石の上。

と、藤壺の宮は紫の上に次ぐ位置を与えられている。

『無名草子』でも、『源氏物語』の登場人物評冒頭の「めでたき女」という項目で、称賛する五人の女性のうちに彼女を挙げている。

b この若き人、「めでたき女は誰々かはべる。」と言へば、「桐壺の更衣、藤壺の宮。葵の上の我から心用ぬ。紫の上さらなり。明石も心にくくいみじ」といふなり。(「めでたき女」一九一頁)^②

桐壺の更衣・藤壺の宮・葵の上・紫の上・明石の君、いずれも光源氏やその父桐壺帝の母やパートナーとして、あるいは子を生み育てた、『源氏物語』中の最重要人物であることに異論はないだろう。『無名草子』でも紫の上などはお気に入りであり、『源氏物語』評中相当な紙幅を彼女のために割いている。また、葵の上のように早くに物語から姿を消

し、光源氏と愛情を交わす場面の少ない女性でも、『無名草子』では大きく取り上げられている。その臨終を描く葵巻を、印象深い巻を最初に数え上げる「巻々の論」で挙げ、場面論「あはれなること」で彼女を追悼する場面に丁寧に着目している。

しかし、この五人の中には『無名草子』のほかの部分ではほとんど言及されない女性もいる。藤壺の宮がそれである。

実は、主要写本では、この部分に欠損がある。

① 彰考館本

めて

たき女はたれくか侍といへはきりつほのかうぬ」(改頁)

の宮あふひのうへのわれからくるもちあむら

さきのうへさらなりあかしも心にくくいみじと

いふなり(三一頁―三三頁)

② 天理本

きりつほのかういの宮

③ 群書類従本

きりつほのかうい□の宮(□は欠字)

となっており、主要写本では「藤壺の宮」と明記している本文はないことがわかる。

これに対し、『無名草子』注釈の嚆矢であるで富倉徳次郎氏が

類本「□の宮」とある。今「藤壺の宮」とする。^⑥
 として以来、この部分には「藤壺の宮」が補われてきた。^⑦

たしかに、誰が考えても『源氏物語』を語るのに藤壺の宮を無視できるはずもなく、「めでたき女」が『源氏物語』の女性ベストファイブであるならば、「□の宮」に「藤壺の宮」を補うのはもっとも妥当な処置であろう。しかし、『無名草子』を詳細に読んでいくと少々腑に落ちない点があるので、以下それを述べていくこととする。

一 藤壺の宮評の少なさ

「めでたき女」以外で、『無名草子』が藤壺の宮に言及するのは次の一箇所のみである。

c 『賢木』、伊勢の御出で立ちのほども艶にいみじ。院隠れさせたまひて後、藤壺の宮、さま変へたまふほどなどあはれなり。（『卷々の論』一九〇頁）

『無名草子』の『源氏物語』評は、まず主要な巻名をあげて寸評する「卷々の論」、女性評、男性評、場面や内容を評するいわゆる「ふしづしの論」と展開していく。最初に印象的な巻名を挙げる「卷々の論」で、賢木巻のさまざまな内容の一部として、藤壺の宮出家が挙げられる。

他の女性への言及も見てみよう。

d あはれなることは、桐壺の更衣の失せのほど、帝の嘆かせたまふほどのこと。『長恨歌の女も、思ひし限りあれば、筆及ばざりけむ。尾花の風に靡きたるよりもなよびかに、撫子の露に濡れたるよりもらうたくなつかしかりし御さまは、花、鳥の、色にも音にもよそふべき方ぞなき。たづね行く幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべくとて、ともし火をかがげ尽くして、眠ることなく眺めおは

します』などあるに、何事も残りの六十巻は推し量られはべりぬ。
 「あはれなること」二〇三―二〇四頁）

e （花散里は）まめ人をば養ひ君にしてはべるらむ、さばかりめでたかりし葵の上の御腹の君も、など人わるき後の親をば設けたまふべき（『好もしき女』一九三頁）

f 葵の上の失せのほどのもあはれなり。御わざの夜、父大臣の闇に迷ひたまへるなど、ことわりにあはれなり。鈍める御衣を奉り換ふとて、我先立たましかば、深く染めたまはまし、などおぼして、かぎりあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

と詠みたまふところ。また、風荒らかに吹き、時雨うちしけるほどに、涙も争ふ心地して、『雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず』と独りごちたまふに、頭中将参りて、

見し人の雨となりにし雲ぬさへいとど時雨にかきくらすかなとあるところ。また、らうたくしたまふ童の、汗衫の装束なべてよりも濃くていみじく屈じ湿りてさぶらふを、いとあはれにおぼして、とりわきらうたくしたまひしかば、『我をさなむ思ふべき』と慰めたまへば、いみじく泣きて御前にさぶらふところなど、いとあはれなり。また、御忌み果てて、君も出でたまひ、日ごろさぶらひつる女房ども、おのおのあからさまに散るとて、おのがじし別れ惜しむところ、いたくあはれなり。また、書きたまへる御手習ひども、大臣見て、泣きたまひなどするも、すべてあはれなる巻なり。（『あはれなること』二〇五―二〇六頁）

g いとほしき人、紫の上。限りなくかたひかしく、いとほしく、あたりの人の心ばへぞ、いと憎き。父宮をはじめ、おぼぢの僧に至るまで、思はしからぬ人々なり。継母などの心ばへ、さるべき仲なれど、さばかりになりぬる人のために、いとさしもやはあるべき。（『いと

ほしき女」(一九五頁)

h 薫大將、はじめより終はりまで、さらでもと思ふふし一つ見えず、返す返すめでたき人なんめり。まことに光源氏の御子にてあらむだに、母君のものはかなさを思ふにはあるべくもあらず。紫の御腹などならばさもありなむ。(『男の論』二〇二頁)

i 紫の上の失せのほどのことども、申すもおろかなり。中略 すべて『幻』は、さながらあはれにはべり。(『あはれなること』二二〇～二二一頁)

順に桐壺の更衣、葵の上、紫の上と挙げた。紫の上についてはこのほかにも、須磨巻の光源氏との離別(『いとほしきこと』)や、それに続く明石君との関係出来、女三宮降嫁に伴う懊悩(『心やましきこと』)について同情的に何度も言及している。なにより、物語中に臨終場面のない明石君をのぞくこの三人については、その臨終が名場面としてこまやかに言及されている。しかし、藤壺の宮の臨終場面には触れていない。

『源氏物語』評の最初の、「巻々の論」で列挙される巻は、「桐壺」「帚木」「夕顔」「紅葉賀」「花宴」「葵」「賢木」「須磨」「明石」「蓬生」「朝顔」「初音」「胡蝶」「野分」「藤裏葉」「若菜」「柏木」「御法」「幻」である。桐壺の更衣・葵の上・紫の上の臨終を含む「桐壺」「葵」「御法」はあるが、藤壺の宮の臨終を描く巻「薄雲」はない。『源氏物語』の「朝顔」には、亡き藤壺の宮に関する記事が若干あるが、『無名草子』が「朝顔」を挙げるのは、「紫の上のもの思へるがいとほしきなり」(一九一頁)と紫の上への関心であり、藤壺の宮への関心からではない。

明石の君は、物語中に死の場面がないので、彼女の死を哀悼する場面への言及がないことはやむを得ない。その代わり、生別の場面について言及がある。

j また、浦を離れて京へおもむきたまふほど。

都出でし春のなげきにとらめや年経る浦を別れぬる秋

などあるほどに、都出でたまひしは、いかにもかくてやむべきことならねば、またたち帰るべきものとおぼされけむに、多くは慰みたまひけむ、この浦は、また何しにかはと、限りにおぼしとちめけむほど、ものごとに目とまりたまひけむ、ことわりなりかし。(『巻々の論』一九〇頁)

が、それだ。これは、明石の浦との別れを強調しているようだが、もちろんそこには明石の人々との別れ、明石の君との離別の情があることは疑いえない。

実は明石の君を称賛する言辞も、多くはない。これでは藤壺の宮だけに言及が少ないとは言えなくなってくる。しかし、明石の君への言及の少なさはある程度理由が推測できる。

k 心やましきこと。紫の上、須磨へ具せられぬことだにあるに、明石の君設けて、問わず語りしおこすること。『浦より遠に漕ぐ舟の』と厭はれて、文の上包みばかり見せたること。中略 正月一日の日、御方々へ参りありきて、いつしか御騒がれもや、とはばかりながら、明石の御方に泊りたること。(『心やましきこと』二二七～二二八頁)

『無名草子』は女達の会話という体裁で論評を進めるが、主要な評者は、自分でも紫の上のことを「限りなくかたひかし」(一九五頁)と白状するほどの大の紫の上虜人であり、彼女の懊悩に同情を惜しまない。反感は主に紫の上を苦しめる光源氏へと向かうが、その原因となった明石の君に対しても余り寛容ではないようである。

その明石の君でさえ、離別が名場面に数え上げられているのに、一人藤壺の宮の臨終の巻だけが看過されているのは、非常に不自然に思われる。

二 『無名草子』で嫌われた人々

前章で、明石の君に対する評が少ないのは、絶賛する紫の上を苦しめる原因となった女性として、いわば嫌われたせいではないかと考えてみた。実は、『源氏物語』の主要人物でありながら、『無名草子』の中ではもっと厳しい批判にさらされる人物がいる。

1 女三の宮こそ、いとほしき人とも言ひつづけられど、『袖濡らせとやひぐらしの』と詠みて、『月待ちても、と言ふなるものを』などあるほどは、いと心苦しきを、あまり言ふかひなきものから、さすがに色めかしきところのおはするが、心づきなきなり。かやうの人は、一筋に子めかしく、おほどきたればこそらつたけれ。あさましき文、大臣に見ゆるも、その御心のしわざぞかし。さることありとおぼさむには、とどまらむをだに、強ひてそそのかし出だしてむとぞおぼさるべきを、さかしらに心苦しげなることも言ひとめて、さる大事をばひき出だしたまへるぞかし。(『いとほしき女』一九六―一九七頁)

m 手習ひの君、これこそ憎きものとも言ひつべき人。さまざま身を一方ならず思ひ乱れて、

鐘の音の絶ゆる響きに音を添へて我が世尽きぬと君につたへよと詠みて、身を捨てたるこそいとほしけれ。兵部卿宮の御事聞きつけて、薫大将

波越ゆるころとも知らで末の松待つらむとのみ思ひけるかな

とのたまへるを、『ところ違へならむ』とて、結びながら返したるほどこそ心まさりすれ。(『いとほしき女』一九七頁)

女三の宮と浮舟(手習の君)については、同情すべき点は認めながらも波線部のように、気に入らない、あるいは憎むべき人物と呼ばれてい

る。この二人の共通点は明白である。建前の配偶者またはそれと等しい愛人がありながら、他の異性と通じた女性である。引用文1では、女三の宮の思慮の浅さだけを責めているようにも見えるが、男性評で浮舟と薫・句の宮との関係に言及する部分はこうなっている。

n また、人、「さはあれど、(薫は)け近くまめまめしげなる方は、おくれたる人にや。浮舟の君、巢守の中の君などの、兵部卿宮には思ひおとしはべるこそ口惜しけれ」と言ふなれば、また、「そは大将の咎にはあらず。女の、せめて色なる心のさま、よからぬゆゑとぞはべる。」(『男の論』二〇二―二〇三頁)

巢守の問題などがあつて、難解な部分であるが、この三角関係については薫に隙があつたのではなく、浮舟の多情に責めがあると結論づけている。「色めかしきところ」を持ち、「さる大事をば引き出だしたまへる」ことを批判される女三の宮についても、男女関係での浮薄さを責めていると考えてよいだろう。

逆に端役であつても、誘惑に靡かず節操を保つた女性には『無名草子』で繰り返し称賛される。六条御息所に仕える中将の君がそれである。

o また、六条御息所の中將こそ、宮仕え人の中にいみじけれ。(『いみじき女』一九二頁)

p いみじきこと。六条わたりの御忍びありきの暁、出でたまふ見送りきこえに、中将の君参るを、隅の間の高欄のもとにしばしひき据ゑたまひて、

咲く花に移るてふ名はつづめども折らで過ぎつき今朝の朝顔

『いかがはずべき』とて、手をとらへたまへるに、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

おほやけごとに聞こえなしたるほど、いみじくおぼゆ。(『いみじきこと』二二二―二二三頁)

光源氏の遊戯的な誘いにとぼけて見せ、女主人の愛人と自分が情を交わすことなどまったく考えも及ばないといった態度を示す彼女が、評価されている。

そもそも『無名草子』で、多情や不誠実を責められるのは女達だけではない。男性論で光源氏を批評する『無名草子』の態度は、お世辞にも絶賛とは言えず、「さらでもとおぼゆるふしぶし多」き人物（「男の論」一九八頁）と手厳しい。

光源氏が批判される点を整理すると、

① 青年時代を共に過ごし、須磨時代には右大臣一派の不興を買って危険を冒して訪ねてくれた頭中将に対して、後年政敵として対立し彼を打ち負かしたこと。

② 明石で明石入道の婿となったこと。

③ 女三の宮を迎え、後には彼女の行状が原因で柏木を睨み殺したことで。

となる。②③は紫の上、①は対等の同性でもっとも親しい関係にあった頭中将に対する二心、不誠実が関係している。これは『無名草子』が紫の上や頭中将鼻肩であり、大好きな彼らを苦しめた事を憎んでいるとも言えるが、『無名草子』のなかで株の高い夕霧も、その長所は雲井の雁との仲を成就した誠実さであり、唯一の欠点として糾弾されるのは落ち葉の宮の一件である。その条は次の通りである。

q まめ人の大将、若き人ともなく、あまりにうるはしだたるはさうざうしけれども、づしやかなる方は大臣にもまさりたまへり。さまざま聞こゆることどもに靡かで、藤の裏葉のうら解けたまふを、心長く待ちつけたまへるほど、ありがたし。女だに、さることはいかでかはとぞおぼゆる。さて、いと思ふやうに住み果てたまひにたる世の末になりて、よしなき落葉の宮設けて、まめ人の名を改め、さ

ま変はりたまふぞ思はずなる。（「男の論」二〇〇頁）

女三の宮、浮舟、この二人のほか、建前の配偶者がありながら他の異性と通じた女性が『源氏物語』にいるだろうか。

空蝉も、それに該当する『源氏物語』の主要人物と言えるだろう。「いみじき女」に彼女の名前が挙がるが、出家後二条東院で光源氏の庇護を受けたことを「心づきなし」と批判するのみで、密通そのものを責める口吻はない。むしろ光源氏を避け通じたことを「むげに人わるき」とさえ言っている。実は、『無名草子』は空蝉の密通そのものを認めていない節がある。

r 「空蝉は、源氏にはまことにうち解けず、うち解けたりと、とりどりに人の申すは、いかなることにか」と言ふ人あれば、『帚木』といふ名にて、うち解けざりけりとは見えてはべるものを。悪しく心得て、さ申す人々も時々はべるなめり」と言ふ。（いみじき女一九二頁）

これによると、空蝉は光源氏に「うち解けざりけり」なので、肌身は許さなかつたということになる。ゆえに不倫の責めを負うこともない。②③もそう一人、藤壺の宮も桐壺帝の後宮に身を置きながら、光源氏と通じている。しかしそのことへの言及は、『無名草子』には一切ない。

三 『無名草子』で言及されない人々

『源氏物語』の重要人物と目されるにも関わらず、『無名草子』で言及されない人物は、藤壺の宮だけではない。例えば、『源氏物語』の男性評で取り上げられるのは、光源氏、蛍兵部卿宮、頭中将、夕霧、柏木、紅梅、匂の宮、薫の八人である。蛍兵部卿宮や紅梅まで登場するのに、朱雀院、冷泉院は登場しない。朧月夜や玉鬘を評する部分で名前こそ出

てくるが、彼ら自身に向かう批評はない。また「めでたき女」に数えられる桐壺の更衣の相手の桐壺帝も同様である。どうやら『無名草子』の物語評では、帝が批判にさらされることはない。後宮の女性も、女御更衣はともかく、后と呼ばれた人への批判は見られない。

他の物語の評に目を転じてみよう。『無名草子』が批評する物語には、現存しないためどのような登場人物がいたかわからないものも多いが、『狭衣物語』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』など、ほぼ登場人物や内容がわかるものもある。

現存『夜の寝覚』では、冷泉院が女主人公中の君に横恋慕するさまが、やや戯画的に描かれている。しかしその一件には『無名草子』は触れない。また、その際に活躍する母后は、女主人公中の君を窮地に陥れようとする、いわば悪役としてきわめて個性的で印象深い人物である。しかし、『無名草子』では彼女への言及はない。『無名草子』の取り上げる『寝覚』は、現在我々が目にするものよりも長大であったようであるが、これらの人物や内容がなかったとは思えない。

『浜松中納言物語』（『みつの浜松』）の女性論では、唐の一の大臣の五の君、大将の姫君、大弐の娘、吉野の姫君が順に評されているが、『源氏物語』の藤壺の宮にも比肩する、主人公中納言の恋人河陽皇后は取り上げられない。

『とりかへばや物語』の主要人物女中納言に対しては、古本『とりかへばや』評では、

s 女中納言こそ、いとみじげにて、もとどりゆるがして子生みたるなどよ。また、月ごとの病、いと汚し。中略 女中納言の死に入り、よみがへるほどこそ、おびたたく恐ろしけれ。鏡持て来て、よろづのこと、暗からず見たるほど、まことしからぬことどもの、いと恐ろしきまでこそはべれ（とりかへばや「二四一—二四二頁」）

とあり、不快感を示している。しかし改作本の女中納言には、

t もとには、女中納言のありさまいと憎きに、これは、何事もいとよくこそあれ。（今とりかへばや「二四三頁」）

と、好意的である。これは、普通に考えれば改作が成功している事への称賛だろうが、うがつた見方をすれば、古本では女中納言は臣下の北の方に収まるが、改作本では中宮に昇っている^①。

その他の散逸物語で、帝や後の語を拾ってみても、あからさまな批判はほとんど見られない。

u 皇太后宮の御振る舞ひ、心ざまこそ、返す返すめでたけれ。すべてそのあたりは、いと心にくくいみじくおぼゆ。（『末葉の露』二五一頁）

は、称賛である。

v また、中宮の、むげに何事もおぼしたらぬこそ、大納言も心劣りして口惜しけれ。同じ心にうち靡き、心を交はし、文の返り事などこそせざらめ、御心のうちには、いとあはれとおぼさるべきなり。

（『海人の刈藻』二五〇頁）

これは中宮に対して評が加えられており、先の仮説に反している。しかし「心づきなし」や「憎し」などの語は見えず、批判や酷評とは異なると考えられる。また、大納言に同情はしても、不倫を戒める態度は保持されている。

唯一帝に批判を加えた疑いがあるのが、『狭衣物語』評である。主人公狭衣大將は、最終的に神託を受けて即位する。

w 何事よりも何事よりも、大將の、帝になられたること、返す返す見苦しく浅ましきことなり。めでたき才、才覚すぐれたる人、世にあれば、大地六反振動することやはあるべき。いと恐ろしく、まことしからぬことどもなり。源氏の院になりたるだに、さらでもありぬ

べきことぞかし。されども、それは正しき皇子にておはする上に、冷泉院の位の御時、我が御身のありさまを聞きあらはして、ところ置きたてまつりたまふにてあれば、さまでの咎にはあるべきもあらず。太上天皇にならずに御位は、ただ人も賜はる例もあるを、これは、今少し奇しくまねびなされたるほどに、いと見苦しきなり。さりとて、帝の御子にてもなし。孫王にて、父大臣の世より姓賜はりたる人の、いとあさましきことなり。何の至りなき女のしわざと言ひながら、むげに心劣りこそしはべれ。大臣さへ院になりて、堀川院と申すとかよな。物語といふもの、いづれもまことしからずと言ふなるに、これは殊の外なることどもにこそあめれ。(「さらでもありぬべきこと」二二三―二三四頁)

狭衣に対する人格攻撃というよりは、物語の筋立てにもの申しているので、人物評としての狭衣批判と言うのは当たらないかもしれない。しかも、狭衣の即位自体を認めないという立場なので、狭衣「帝」を批判しているという自覚はないものと思われる。

このように、『源氏物語』以外の物語評でも、帝后に対する評はきわめて少なく、批判にさらされることは皆無に近い。

先ほどは『源氏物語』の桐壺帝、朱雀帝、冷泉帝についてのみ述べたが、藤壺の宮以外の后達はどうか。明石中宮には言及がない。秋好中宮は、母六条御息所の条に付随する形で、

× 御子の中宮も、我から心用あなど、いとみじく、心にくき人の中にも交ぜきこえつべきが、などやらむ、嫉ましきは、源氏の大臣のあまりにもてなしたまふが、心づきなかるべし。(「好ましき女」一九四頁)

と、妬みを告白しつつも人柄については称賛されている。

もう一人、弘徽殿太后(朱雀院母后)は『無名草子』で言及されない。

彼女はさほど重要視されなかったかとも考えられるが、同様の意地悪な継母役の式部卿宮北の方(紫の上継母)については、引用gに「継母などの心ばへ、さるべき仲なれど、さばかりになりぬる人のために、いとさしもやはあるべき。」(「いとほしき女」一九五頁)と言及がある。彼女に較べれば、弘徽殿太后の方がよほど登場回数も多く、物語の筋立てへの影響も大きく、決して無視されても当然の人物とは言えまい。しかも評を加えるとするれば、それは式部卿北の方に対すると同じように批判的な言辞となる。しかし『無名草子』はそれをしない。

四 結論

『無名草子』は、理由は明らかでないが、物語の帝后への批判を巧妙に避けている。一方、女性の多情や密通には冷淡な態度をとっている。もし、『無名草子』が藤壺の宮に評を加えるとするれば、それは称賛とはなりにくいだろう。后への酷評を禁じられていたとすれば、藤壺の宮は『無名草子』にとって言及不能の存在なのである。ゆえに、「めでたき女」の「□の宮」に「藤壺の宮」を補つことに私はためらいを感じている。¹²⁾

いつの日か、「めでたき女」に脱文のない善本が発見され、そこにはやはり「藤壺の宮」とあるのかもしれない。しかし少なくとも『無名草子』の批評態度は、それ以上彼女について詳しく批評することができない性格を持っている。

さて、本来であれば、なぜ『無名草子』はこのような性格を持つに至ったのかを考察せねばならないが、問題が大きく今すぐ解答は得られそうにない。まずは、作者の人生経験や哲学と関係づけるのがよさそうだが、作者は俊成卿女説が有力であるものの、いまだ決定的ではない。むしろどのような場で読まれることを考えていたのかが関係するように思

われる。おそらくそこは、帝后への批判や、配偶者への背信行為を容認するようなことは、口ににくい空間だったのではなからうか。誰に見せるために書いたのか、いわば想定読者の問題かと考えているが、今後の課題としたい。

注

- ① 国語国文学研究史大成3『源氏物語 上』(一九六〇年、三省堂) 傍線筆者
- ② 新編日本古典文学全集『松浦宮物語 無名草子』(一九九九年、小学館) 傍線筆者
- ③ 『無名草子 水府明德会彰考館蔵』(笠間影印叢刊)
- ④ ②の校訂付記より復元
- ⑤ 新潮日本古典集成『無名草子』(一九七六年、新潮社)の本文校訂一覧より復元
- ⑥ 一九五四年、有精堂
- ⑦ 片岡利博氏は「諸注とも、『藤壺』を意補するが、根拠がない。類従本が空白のままにした態度をしばらく尊重しておく。」とする。(『無名草子注釈』(一)女性評・その二および源氏物語評・その一、「文林」二十一号、一九八六年十二月)
- ⑧ 「宇治のゆかりは、『こじま』に様変はりて」の「宇治のゆかり」「こじま」を巻名の異名と見る説もあるが、現存のいずれの巻に相当するか不確定であるので、今は省略した。
- ⑨ 片岡利博「無名草子雑考」(「文林」一八号、一九八三年二月)
- ⑩ 『源氏物語』以外では、『とりかへばや物語』で、女中納言の建前の妻でありながら宮の宰相中將と通じる四の君について、「これはにくき」「いとつたてけれ」(今とりかへばや「二四四」「二四五頁」と批判している。一方『浜松中納言物語』の大貳の娘は、結婚後も主人公中納言と違っているが、『無名草子』では「何となくいとほしくあはれなれ。(中略)若き女のさまで深きところなからむなどは、かやうならむぞらうたき。」(二三八頁)と評され、「深きところなからむ」という浅はかさの指摘は

あるが、それほど酷評はされていない。『浜松中納言物語』の主人公中納言は『無名草子』では、「心用ぬ、ありさまなどあらまほしく、この、薫大将のたくひになりぬべく、めでたくこそあれ」(二三五頁)と絶賛される人物である。また、この逢瀬は大貳の娘の夫には露見していない。光源氏や薫のような優れた男性を裏切り苦しめるのは許せないが、平凡な夫に背いて中納言のようなすばらしい男性に靡いてしまうのは仕方ないことだと考えるような、ダブルスタンダードが多少あるのかも知れない。

- ⑪ 『風葉和歌集』所載の古本の女中納言の和歌の詠者名が「権中納言後内大臣上」とあることから推測される。松尾聡「とりかへばや物語考證(下)―その形態について―」(「国語と国文学」第十五卷第十一号、一九三八年十一月)

⑫ 「□の宮」が藤壺の宮でないとすれば、□に何を補えばよいのか、本来であれば対案を示さなければならぬところである。「○○の宮」と呼ばれる『源氏物語』の女性登場人物で、「藤壺の宮」以上にふさわしい人物があるかと問われれば、ないと答えるしかない。しかし必ず何かを補入しなければならぬのだろうか。彰考館本や天理本では空白はない。「桐壺の更衣の宮」という呼称はありそうにないが、たとえば、桐壺の更衣は『源氏物語』の中では「御息所」とも呼ばれている。「御息所」は写本では「宮す所」などと「宮」の宛字で表記されることも多い。そのような注記や傍記が、ある時期本文を混乱させたという想像は許されないだろうか。

(大阪府立工業高等学校助教授)